

書評

The Evolution of Clastic Sedimentology

Hakuyu Okada with Alec Kenyon-Smith 著

Dunedin Academic Press, 2005, xix+251pp.

ISBN 1-903765-49-8, £ 45, US\$ 85, 9870円

2002年に岡田博有氏は『堆積学—新しい地球科学の成立—』（古今書院）を世に送り出した。これは現代地質科学の先端分野のひとつである堆積学の成立と発展の跡をたどり、現在の体系を俯瞰し、未来を展望した力作である。同書についてはすでに国内的に周知されていることでもあり、その内容についてここに改めて述べる必要もないであろう。しかし、その出版当時、世界を見渡してみても類書がまったくなく、国際版の誕生を期待する声が高かった。

この度、その期待が実現し、エディンバラの出版社から『碎屑性堆積学の進化』という英文表題を掲げた本書が上梓された。これを原著と比較してみると、協力者としてA.Kenyon-Smithの名が新たに著者に加わり、本文中の図のひとつであるWilliam Smithのイングランド地質図が彩色されて口絵になっていることにまず気づく。本文ではRobert H. Dott, Jr.の序言があつて、その次から原著と同一の章立ての記述が続く。しかし、原著の特色として多数の研究者の肖像（おおかたは著者自身の撮影による）は、追加ないし入れ替えによってさらに豊富になっている。さらに注目されるのは、後述するように最終章で、原著では1ページあまりの記述に過ぎなかった「環境堆積学と社会堆積学」の項が6ページ余まで拡充されたことである。また、原著は参考文献の量の多さでも目だっていたが、それがさらに補充され、そして和文のみだった文献もことごとく英訳されて収録されている。

日本の地球科学者が著した和書が後に翻訳されて、その英語版が国外で出版された例はきわめて稀である。そこで、本書誕生に至った経緯を評者の承知している範囲で、まずここに紹介しておきたい。

著者の岡田氏は堆積学の世界的権威として知られているが、最初の研究論文が実は九州大学大学院時代の熊本県御船地域の白亜紀二枚貝の新属新種の記載であったことは意外に知られていない。しかし、その後御所浦の白亜紀砂岩の研究が学位論文となり、これがきっかけとなって英国文化振興会より奨学金を受け、当時新設されたばかりのレディング大学堆積学研究所に留学した。そこで同研究所創設者のPercival Allen教授、指導教官のJohn R. L. Allen教授（当時講師）の薫陶を受けて、ウエールズのシル系層を研究した。このときに岡田氏を現地に案内したのが当時University College LondonのリーダーだったA. J. Kenyon-Smithであり、その後両者の間で続いた親交の結果が英語版誕生という形で結実したといえるだろう。さらに序言を執筆したウィスコンシン大学のR. H. Dott教授は米国の著名な堆積学者で、かつ地質学史研究者であるが、彼もまた岡田氏のよき理解者として本書の英文原稿のすべてに目を通した人でもある。

さて、本書を通読してみると、元来読みやすい原著の文章が、よい協力者を得て流暢かつ平明な英文となっていることに感銘を受ける。Dott教授の「序言」を読むと、これは堆積学の教科書ではなくて、碎屑性堆積物についての理解が、層序学と海洋地質学という大きな背景のもとで過去3世紀の間にどのように進展したかを明らかにした書物なのだ、と記している。そして、原著の出版以来、国際的に高まった英語版への要望に応えた本書が、若い堆積学者にとっては特に1950～1970年代の堆積学の発達期の経過を俯瞰する機会となるし、また年配のグループには彼ら自身の国から遠く離れたところでどのような貢献がなされていたのかを知る有益な機会ともなると説かれている。これは英語圏の読者をもつ

ばら意識した評言であるが、翻ってわが国内でも現代英語で記されたテキストにじかに触れたい地球科学の学生にはぜひ薦めたいと思う。

原著の中でも特色としているのは「日本の堆積学」の章であった。この度の英語版の出現によって、1930年代の草創期における高い見識を備えた先覚者たちの活動時代から現在に至るまでの多様な研究内容、研究組織あるいは研究機関の整備など、日本の事情が詳しく国外に紹介されることになったのは、まことに喜ばしい。原著の巻末索引では人名と事項が一括されていたが、英語版では索引が2分されて、それぞれより充実したものになっている。これもまた国際的にはなじみの少ない日本人研究者の紹介に少なからず役立つことであろう。

「21世紀の堆積学」の章もまたユニークである。惑星堆積学の項に続く環境堆積学と社会堆積学の項では、これまでの堆積学が自然的地球環境を対象とする「環境堆積学」であるのに対して、いまや人為的環境変化を追究する「社会堆積学」の分野が展開していると岡田氏は主張した。英語版の刊行に際して、この項が全面的に改訂・加筆されて、水俣病で知られた八代海における調査の成果が詳しく紹介されている。これによってまたひとつ日本の研究者が先行している領域の存在が明らかにされたというべきである。人間活動の場としての地球の未来のために地球科学者が関与する必要性がいつそう意識される時代にあつて、本書は堆積学の役割を省察する機会を提供している。

以上のような内容を念頭におくと、2006年8月下旬、福岡市における国際堆積学会議(17th International Sedimentological Congress)の開催を控えたこの時期における本書発行の意義の大きさにことさら気づかざるを得ないのである。

高柳洋吉

なぜ貝の化石が山頂に？ 地球に歴史を与えた男ニコラウス・ステノ

アラン・カトラー著、鈴木豊雄訳

清流出版、2005年8月9日発行、254 pp.,

ISBN 4-86029-116-6, 2,000円（税別）

ようやく待望の翻訳書が出版された。原著『The Seashell on the Mountaintop』の出版が2003年であるから、素早く出版されたといえようが、昨秋ステノの『プロドロムス』の翻訳が出版されたときに本書の話を目にしていたので、まだかまだかと待っていたのだ。

ニコラウス・ステノは1638年コペンハーゲンで生まれ、1686年北ドイツのシュヴェリンで死亡した。著書『プロドロムス』は、1669年イタリア・フィレンツェで出版され、貝の化石が山頂の地層から出てくることを自然学的な体系の中できちんと説明しようとした。『プロドロムス』とは、後に書こうとしたが実際には書けなかった『固体論』の序章のようなもので、「地層累重の法則」も「結晶の面角一定の法則」も含まれている。本来どのようにして海成の貝が海から離れた場所に取り残されたのかと発せられた疑問は、海の貝という物体が岩という別の物体の中にある点に問題を見出せば、「固体の中に固体があつたとき最初に固くなった方が、相手を刻印する」という形で、生成の順序関係として、より一般化されて答えられることになるのである。こうしてステノは自然物の相互関係から、地球の歴史をひも解く原理を見出した。

時は17世紀、科学革命の時代である。現在とは諸般の事情がかなり異なっており、不明なことはいくらでもある。現在は当たり前のような「地層累重の法則」がなぜ大変な問題だったのか。当時、人々は化石をどのように考えていたのか。ステノはなぜデンマークからイタリアへ行き、そして北ドイツで死んだのか。ステノは近代的な化石観をどのようにして獲得したのか、等々。これらの

疑問にカトラーはわかりやすく答えてくれる。

著者アラン・カトラーはスミソニアン博物館に所属する地質学者であり、サイエンスライターでもある。本書を執筆するためにかなり詳細な調査を行っている。これまであまり触れられていなかったステノの生涯もかなり書き込んである。まずは、カトラーの描くステノの復元にひたりきるのも悪くない。ステノはコペンハーゲンの金細工職人の息子である。幼少のうちに父が亡くなり、母は何度も再婚する。幼い頃の不安定な生活がその後の魂の放浪癖を導いたという。サメの頭の解剖学から化石の起源を説き、地球に歴史という時間を入れることができたのは、魂の放浪癖の故だとカトラーはいう。青白く角ばった顔、黒い瞳の痩せた若者は、コペンハーゲン大学で医学を学び、凄腕の解剖学者に育っていく。当時の解剖学は今日のヒトゲノムの配列と同じくらい新鮮で刺激的だったようだ。当時は化石が薬の材料とされており、医者としてまず化石の薬効を学ぶことで、化石と出会う。もちろんコペンハーゲンには化石は産出しな。ステノはアムステルダム、ライデン、パリとその解剖の技術が買われて有名になっていく。金細工職人の父から器用さを受け継いだのか、感じのいい気取りのない身のこなしとメスのような切れと冴え。アムステルダムでは耳下腺の分泌管であるステノ管を発見するが、ガレノスの古い教説やデカルトなど当時第一人者たちの学説を切って捨てたので敵も増える。就職はうまくいかず、メディチ家を頼ってフィレンツェまで下った。そして、サメの頭の解剖を美しくやりとげ、ようやくメディチ宮廷の寵児となる。ステノ自身は、サメの頭の解剖を通して、舌石はサメの歯の化石であると確信し、他の化石も自然の形成力の産物ではなく、もっと単純な論理すなわち化石は生物起源であると考察をひろげていく。彼の地質学の始まりである。もちろん世の中に地質学は存在していない時代である。ちょうどその頃、ステノは改宗する。

ステノはデンマークで生まれたので、ルター派として育ったが、フィレンツェでカトリックに改宗した。なぜ、何が契機となって改宗したのか、あまりよくわかっていなかったが、カトラーはかなりうまく説明している。改宗したちょうどその時、ステノはデンマーク王から召還の命令を受ける。デンマーク王としては、有名になったステノを引き戻さないほうはない。ステノは気が向かないから、ゆるゆると時間をかけてあちらこちらをまわっていた。結局デンマークまで行きつかないうちに王が死亡してしまう。もちろん就職などうまくいかなかった。ステノはまたフィレンツェに戻った。その後、ステノは1度だけデンマークとの間を往復している。生活はうまくいかなかったが、多くの露頭や化石の産出状況を観察できた。ステノはちゃんとした『固体論』を書きかけたのだが、まずは『プロドロムス』だけ書き上げ、それは何とか出版になった。この後のステノの動きは不明瞭になってくる。

ステノは科学の研究も神学の研究も進めたいと思った。ステノはカトリックの司教に任命され、北ヨーロッパの異教徒の地に赴任させられる。しかも名義司教だから、教会も司教の座もない。ステノは司教を辞めたかったが、認められなかった。最期の地シェヴェリンで描かれた肖像画には疲れて痩せた男が描かれている。メディチ家のコジモはステノが死んだことを知り、遺体をひきとり、フィレンツェのサンロレンツォ聖堂に埋葬させた。1988年になって、ようやくステノは聖人と認められ列福ミサが行われた。

ステノは生前、認められず、忘れ去られてしまったと普通の地質学史には書かれているが、本書では、ステノの同時代の研究者への影響をよく書いている。『プロドロムス』は1671年にイギリスのロンドン王立協会の目に留まる。王立協会書記のヘンリー・オルデンブルクが英語に翻訳する。当時のイギリスで論争をはっていたマーティン・リスターたちの反対にあったりするが、ジョン・ウッドワードやライブニッツの活動などに引き継がれていく。ステノの死後、まったくステノが無視されたのではなく、19世紀に花開く近代地質学へ伝わっていた部分もあることが本書では強調されている。

本書の翻訳には、『プロドロムス』の翻訳を行なったステノ研究者である山田俊弘氏が助言をしている。大きな誤訳もないようで

ある。ステノの伝記として楽しめる。読み物としても楽しい。そして、カトラーが復元したステノ像がこれからどのように変化していくか楽しみでもある。

矢島道子

学術集会参加報告

化学合成化石群集研究集会CHIM（Chemosynthesis Informal Meeting）北海道巡検報告

はじめに

変動帯に位置する日本列島は、化学合成生態系の進化を研究する上で世界的な宝庫といえる。各地には過去の沖合・深海堆積物が露出し、白亜系や新生界から報告された化学合成化石群集の産地は80近くにのぼる。また周辺海域においては、有人潜水艇によって現生の化学合成群集の生態や地質学的背景が数多くの地点で詳細に調査されている。2001年6月に東京で開催された日本古生物学会年会ミレニアムシンポジウム「21世紀の古生物学」では、「化学合成化石群集の研究手法と今後の研究展望－化石産状と時空分布を中心に」というテーマで、各研究者が日本各地の化学合成化石群集についてデータをもちより議論がたたかわされた。この結果は、「Paleontological Research」誌の7巻4号に特集号としてまとめられた。日本列島にその記録が豊富に残されている白亜紀から新生代は、化学合成化石群集の分類構成が大きく変革する時期であり、群集の主役が腕足類から二枚貝類へ交代し、現在の熱水・湧水域で繁栄を極めているシロウリガイ類が放散した。化学合成生態系の変革の実体やその背景を明らかにするためには、化石産地ごとに露頭・化石産状等を詳細に記録する、分類群の分布とそれを支えた熱水・湧水の原因・動態との関係を明らかにする、さらにはそれらの記録を時空分布の中に位置づけ物質循環をはじめとする地球環境変動との対応を探ることが課題として掲げられた。フィールドワーク発の「21世紀の古生物学」への挑戦が始まった。

ミレニアムシンポジウム以降、間嶋隆一（横浜国立大学）、天野和孝（上越教育大学）、延原尊美（静岡大学）、疋田吉識（中川町自然誌博物館）、佐々木猛智（東京大学）が中心となり、化学合成化石群集に関する互いの研究の現状を語り合う会合を定常的にもうとうということになった。この活動は、古生物学会の年会・例会の折に夜間小集会などの形をとって発展・継続し、CHIM（Chemosynthesis Informal Meeting）と呼ばれている。CHIMは、普段から互いの研究の進展やフィールド案内、科研費申請での連携等をメールでやりとりしており、このネットワークは興味ある学生・院生・PDも巻き込んで現在メーリングリストに発展している。集会を繰り返す初期の段階から、互いにデータを持ち寄るだけでなく、現地での巡検・討論会の機会をもとうという声が自然に上がり、今回の北海道巡検に発展した。以下にその巡検の概要を報告する。参加者は、間嶋隆一・野崎 篤・福原 健（横浜国立大学）、天野和孝（上越教育大学）、延原尊美・天野智博（静岡大学）、疋田吉識（中川町自然誌博物館、コンビナー）、小池伯一・柳沢一則（信州新町化石博物館）、栗原行人（埼玉県立自然史博物館）、ロバート・ジェンキンス（東京大学）、村上瑞季・栗原 慧（早稲田大学）、池田昌之（京都大学）の14名である。また、初日の案内者として、加納 学・栗原憲一（三笠市立博物館）、鈴木明彦（北海道教育大学）、最終日の案内者として、石村豊徳・井尻 暁（北海道大学）の各氏に同行いただいた。

第1日目（9月4日）三笠周辺：幌内層と蝦夷層群中部

三笠市立博物館に集合し、同館を見学後STOP1の幾春別川沿い



図 1. 始新統幌内層の石灰岩体。塊状泥岩中に不規則な形状で重なっている。

林道に車で移動、始新統幌内層の塊状泥岩を見学した。ここでは、化学合成二枚貝であるシロウリガイ類 *Hubertschenckia ezoensis*、オウナガイ類 *Conchocele bisecta* などを含む石灰岩体が見られる。石灰岩体は幅 1.5 m、高さ 3 m ほどの規模で、不規則な形に積みあがっている (図 1)。シロウリガイ類やオウナガイ類は、石灰岩体およびその直下の泥岩からのみ産出し、周囲の泥岩には、*Malletia poronatica*、*Cyclocardia tokudai* などの漸深海帯の酸化的な泥底に生息する二枚貝類が散在する。石灰岩体直下の泥岩に多数散在するシロウリガイ類やオウナガイ類は保存良好な合併個体で、ほぼ自生的な産状と考えられる。石灰岩体直下の泥岩にも部分的にコンクリーションは形成されているが、それらの形成場所は必ずしも化学合成二枚貝類の産出する位置と一致しない。なお、転石の石灰岩体には角礫化作用を被った岩相も見られる。陸棚斜面の泥底域において、湧水が断続的に継続していたと考えられるが、湧水の起源、流体の移動経路や持続性等について、このセクションをどのように解釈するのか議論された。ここでの議論は、以後の地点において、地下断面を詳細に復元する意識をもって観察をする契機となった。

STOP 2 では、蝦夷層群中部 (アルビアン) のタービダイトに挟在する厚さ 1 m 以上の泥岩から、*Solemya cf. angusticaudata*、*Conchocele* sp., *Calyptogena* sp., *Nipponothracia ponbetsuensis* などの化学合成二枚貝が産出する。泥岩には直径 10 ~ 20 cm の不定形コンクリーションが含まれるが、幌内層と同様、それらの形成場所は必ずしも化学合成二枚貝の産出する位置と一致しない。この地点は、Kanie and Sakai (1997) によって新属 *Nipponothracia* が化学合成二枚貝として認識されたことで有名であるが、シロウリガイ類の最古の産出記録をマークしているという点でも重要である。シロウリガイ類は新生代に入って産出例が急増するが、白亜紀における生息環境や湧水依存性について議論を深める必要性を感じた。周辺の沢でアンモナイトを採集し、ここで記念撮影を行った (図 2)。

第 2 日目 中川町：蝦夷層群上部一安川炭酸塩コンクリーション群
九州地域で猛威を振っている台風 14 号の接近を警戒して予



図 2. 巡検参加者集合写真 (初日)。

定を変更し、朝 7:30 に三笠を出発し中川町へ移動した。その際、STOP 3 (小平町の蝦夷層群中部、前期セノマニアンの湧水起源化学合成群集)、STOP 4 (初山別の築別層、中期中新世の鯨骨群集) は省略した。STOP 5 にて、蝦夷層群上部の大曲層 (カンパニアン) の安川炭酸塩コンクリーション群をロバート・ジェンキンス氏の案内で見学した。この地点は、STOP 6 の大曲層のレンズ状炭酸塩岩体とほぼ同層準にあたる。河床面に露出した砂岩泥岩互層中に、小規模な (長さ約 60 cm のレンズ状) の複数の炭酸塩岩が挟在しており、湧水周辺の岩相変化が観察できる。炭酸塩岩の基質であるミクライトに、黄色や白色の方解石の脈が不規則に入る。その産状からは、同一地点でほぼ連続的に湧水が滲み出していたというよりは、ある程度の広がりをもった弱い断続的な滲み出しの印象をうける。コンクリーションには、ツキガイ類 *Miltha* sp. やキヌタレガイ類 *Acharax ezoensis* が多く、チューブワーム様化石も一部に含まれていた。もしこれがメタンを直接利用するチューブワームであるならば、当時の SMI (Sulfate Methane Interface) は海底面付近にあったことになる。しかし、一方ではツキガイ類やキヌタレガイ類の群集は、むしろ硫化水素を利用していたと考えられるので SMI は海底面より深い位置にあったことを示唆する。当時の海底下断面における化学的なプロファイルをどのように化石産状とすりあわせて復元するのかを議論した。なお、炭酸塩岩の産出地点側方の中粒砂岩には不定形のジュールが多く含まれ、アンモナイトが密集する産状が認められる。

第 3 日目 中川町：蝦夷層群上部一大曲炭酸塩岩レンズ

STOP 6 は、STOP 5 から南南西約 1.5 km 離れた地点にあり、大曲層中に挟在する大規模な炭酸塩岩体が露出している。本岩体は、Hikida *et al.* (2003) によって保存良好な化学合成化石群集が報告されており、世界一美しいチューブワーム化石を採集できる (図 3)。川の中に屹立する高さ 5 m ほどの岩体は御神体然とした存在感を示していたが、その上部は物理的風化で崩れつつあり露頭保全の手だてが必要と感じた。チューブワームを含む岩体の他、微小な原始腹足類、ツキガイモドキ類 *Miltha* sp., キヌタレガイ類を採集した。ここでも、当時の SMI をどこに設定するかなど、地下断面での流体の起源と移動が議論の中心になった。古生物研究者は、自ら培った地質学的なバックグラウンド、露頭での岩相・化石産状の詳細な観察を地球化学的分析値と有効に結びつけ、リアルな復元を提示できる有利さを持っていることを再確認できた。

午後は台風接近に伴いフィールドワークを切り上げ、中川町自然誌博物館に移動し研究発表会を開催した。蝦夷層群上部の大曲層中に含まれる安川炭酸塩コンクリーション群に関する研究 (ロバート・ジェンキンス)、大曲層炭酸塩岩体に含まれるバクテリア様構造 (疋田吉識)、宮崎県の鮮新統高鍋層ボーリングデータ速報 (間嶋隆一)、長野県の中新統赤怒田石灰岩体の概要 (延原尊美)、など多様な話題が提供され、来年度の科研費獲得に向けての戦略アイデアも提案された。

夜は、台風 14 号のまっただ中、宿泊先のボンピラアクアリズィングにて交流会をかねたバーベキュー大会を開催した。今回の参加者を見ると、化学合成化石群集の研究者だけでなく、学生・院



図3. 大曲層（カンパニアン）炭酸塩岩体中のチューブワーム様化石の産状。

生の参加によって層序、堆積相、脊椎動物化石、アンモナイト研究者など多様なメンバー構成となっていることを実感した。各自の研究内容のこと、研究者としての将来のことなど様々な話題で盛り上がった。

第4日目 厚田村望来：上部中新統望来層の化学合成化石群集

中川町自然誌博物館を出発し、STOP 7の望来海岸へ半日をかけて移動した。台風通過による余波で海はかなり荒れていたが、なんとか露頭観察することができた。現地で石村豊穂・井尻 暁の両氏と合流した。ここでは、高さ約30 m、幅数 kmにわたる海岸沿いの崖に、石灰質コンクリーションを複数層にわたって挟在する厚い塊状泥岩が露出している（図4）。炭酸塩岩の発達する地下断面を観察するのに良好なサイトであり、石村ほか（2005）によって地質学雑誌の口絵にも紹介されている。炭酸塩岩が発達する層にはシロウリガイ類化石の合併個体が多数密集する。Amano（2003）はシロウリガイ類にかけられた穿孔痕から捕食圧を議論しているが、なるほど穿孔痕が目立つ印象をうけた。それにしても、このような透水性の悪い泥岩中に断続的に発達する炭酸塩岩を成立せしめた湧水様式（起源と通路）について、われわれはどのようなモデルを提示できるのだろうか。「現在の海洋底の湧水モデルをそのまま地質学的過去の湧水現象にあてはめてよいか」という間嶋氏の言葉が印象に残った。

夕刻、札幌に到着し居酒屋にて打ち上げを行い、今回の京都例会での集結を誓い合い、互いの帰路についた。

次なる研究ステップへ

今回の巡検を通して実感したことは、「化学合成化石群集を産出する炭酸塩岩は、これまで単に湧水起源のコンクリーションとして一括りにされていたが、実際に観察してみると岩相や産状について実にさまざまなバリエーションが認められる」ということである。この巡検で、それぞれが各自の調査地で観察してきた炭酸塩岩との共通性や異質性について情報交換がなされ、湧水の存在



図4. 中新統望来層の炭酸塩岩体。

様式（起源・通路・地下断面の化学組成）やそれに伴う化石群集の変化について議論が深められた。次なるステップは、それらの湧水現象について、詳細な露頭観察から微小領域の検鏡観察・化学分析までの情報を有機的に関連づけ、湧水場の地下構造やその活動履歴についてリアルな復元像を露頭ごとに提示することにある。白亜紀から新生代にかけての化学合成化石群集の変化の背景にはどのような湧水現象があったのかに関して、地球環境変動と生物の相互作用の観点から、日本から新しい情報を発信できることを確信した巡検だった。

最後に、今回の巡検のコース立案から実行まで原動力となられた中川町自然誌博物館の疋田吉識氏、ならびに現地の案内、サポート等において協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。三笠市立博物館、中川町自然誌博物館、小平町文化交流センターの皆様には施設の見学・利用に関してお世話になりました。ここに記して感謝いたします。CHIMのメンバーリストにご参加したい方は、中川町自然誌博物館の疋田（nmhikida@coral.ocn.ne.jp）までご連絡ください。

延原尊美（静岡大学教育学部）

引用文献

- Amano, K., 2003. Predatory gastropod drill holes in Upper Miocene cold seep bivalves, Hokkaido, Japan. *Veliger*, **46**, 90-96.
 Hikida, Y., Suzuki, S., Togo, Y. and Ijiri, A., 2003. An exceptionally well-preserved fossil seep community from the Cretaceous Yezo Group in the Nakagawa area, Hokkaido, northern Japan. *Paleontological Research*, **7**, 329-342.
 石村豊穂・井尻 暁・阿部恒平・角皆 潤, 2005. 北海道, 中新統望来層におけるシロウリガイ属化石をともなう石灰質団塊の特徴. 地質学雑誌, **111**, VII-VIII.
 Kanie, Y. and Sakai, T., 1997. Chemosynthetic thraciid bivalve *Nipponothracia*, gen. nov. from the Lower Cretaceous and Middle Miocene mudstones in Japan. *Venus*, **56**, 205-220.

行事予定

●講演申込手順と予稿集原稿の書き方の改訂

2006年2月の第2回評議委員会で、講演申込手順と予稿集原稿の書き方が大幅に改訂されました。本号の最初のページをご覧ください。次回の2006年年会(松江)からこの方式で実施します。また、申込・講演方法についての最新情報は日本古生物学会ホームページ (<http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp/palaeont/>) に掲示しますので必ずご覧ください。

●2006年年会・総会

島根県松江市(開催校:島根大学)で2006年6月23日(金)、24日(土)、25日(日)に開催されます。シンポジウムは「日本海の生物相の変遷と環境変動:過去、現在、そして未来へ向けて」と題して行われます。個人講演の申込み〆切は2006年4月28日(金)です(必着:期限厳守)。上記のとおり、この年会から申し込み手順と予稿原稿の書き方が変更になりますので、ご注意ください。

●第156回例会

徳島県徳島市(開催:徳島県立博物館)で2007年2月2日(金)、3日(土)、4日(日)に開催されます。個人講演の申込み〆切は2006年11月30日(木)の予定です。

◆講演申込先[2006年年会・総会から下記に変更になります。ご注意ください。]

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7事業所
産業技術総合研究所・地質情報研究部門・地球変動史研究グループ
日本古生物学会行事係 柳沢 幸夫
Phone: 029-861-2411; Fax.: 029-861-3639
E-mail: y.yanagisawa@aist.go.jp

●2007年以降の年会・例会

これまでに次のような開催希望のお申し出がありました(まだ、決定ではありません)。現在、常務委員会で検討中です。
2007年夏:2007年年会・総会、大阪市立大学

●年会・例会の開催、および年会・例会におけるシンポジウムの企画は公募制です。企画をお持ちの方はお気軽に行事係までご相談下さい。

学会記事

日本古生物学会(2005・2006年度)

第2回定例評議員会議事録

日時:2006年2月3日(土)9:30-13:00

場所:京都大学百周年時計台記念館2階会議室III

出席(敬称省略:ABC順):北里会長、安達、天野、長谷川、平野、平山、加瀬、甲能、前田、間嶋、真鍋、小笠原、大野、大野、瀬戸口、棚部、生形、植村、柳沢

欠席:松本名誉会長、近藤(→安藤)、小澤(→瀬戸口)、富田(→真鍋)、西(→北里)、尾田(→長谷川)

書記:庶務幹事(豊福・鈴木)

報告事項

常務委員会報告(生形)

庶務(生形)

1. 文部科学省から文部科学大臣表彰の科学技術賞および若手科学賞の候補者について学会推薦の依頼があったが、推薦依頼書が学会事務センター宛に郵送されて締め切り間近まで当会に到着しなかったため、本年度は推薦を見送った。来年の推薦に備えるとともに、文部科学省等に対して学会事務局の変更を速やかに通知する。
2. 賞状・メダル関連の物品を仙台から静岡に引き継いだ。
3. 幹事を以下の諸君に依頼した:庶務幹事、鈴木雄太郎・豊福高志;会計幹事、重田康成;行事幹事、利光誠一・兼子尚知・中島 礼;欧文誌編集幹事、遠藤一佳・本山 功;化石編集幹事、樽 創;企画・広報幹事、田口公則;友の会幹事、大花民子。
4. 地球惑星科学連合関連委員を以下の諸君に依頼した:地球惑星科学連合評議会委員、北里 洋;地球惑星科学連合窓口委員、棚部一成;地球惑星科学連合委員(財務担当)、西 弘嗣;地球惑星科学連合教育委員会委員、天野和孝;地球惑星科学連合国際交流委員会委員、大路樹生。
5. 分類学会連合担当を佐々木猛智君に依頼した。
6. 常務委員、幹事、各種委員に委嘱状を送付した。
7. 大学評価・学位授与機構より、機関別認証評価に関わる専門委員の選考結果について通知があり、本学会から推薦した候補の推薦が見送られた。
8. Paleontological Researchの図について英国のG. J. H. McCall氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。これに伴い、欧文の使用許可書様式を新たに作成した。
9. 日本学術会議協力学術団体の申込みを済ませた。
10. 国立情報学研究所と「新電子図書館サービス覚書・申合せ」を取り交わした。以前の評議員会での議決に従い、PR誌と化石誌に掲載された論文のうち1年を経過したものを電子媒体として無料で提供することになる。
11. TSPS/JNSの図について米国のSherwood W. Wise, Jr.氏より使用許可申請があり、許可書を送った。
12. 化石の図について琵琶湖博物館の高橋啓一氏より使用許可申請があり、許可書を送った。
13. 第9回太平洋地域新第三系層序国際会議への後援依頼に対して承諾の返事を送った。
14. PR誌への広告記事掲載依頼について、Journal of Systematic Palaeontology誌に回答を送り、化石誌への掲載を促した。
15. 自然史学会連合より次期代表候補の推薦依頼があった。評議員からの推薦等に基づき、池谷仙之君を甲能委員経由で推薦した。
16. 地球惑星科学連合国際委員会から国際関連の委員会委員・役員等のリストを求められ、評議員MLを通じて調査したが、該当者はいなかった。
17. 男女共同参画委員会設立準備会準備委員候補者の推薦依頼があったが、適当な候補者が見つからなかったため、本会からの推薦を見送ることとした。
18. ポスター賞の新設に関する原案と、それに伴う日本古生物学会賞表彰規則並びに学会賞選考委員会及び賞の委員会運営内規の改訂原案を評議員会に諮ることとした。
19. 次回京都例会でポスター賞を授与する原案を評議員会に諮ることとした。

渉外(植村)

1. 会長変更届けを日本学術会議、日本学術振興会、日本科学研究振興会へ提出した。
2. 科学研究費補助金の学術定期刊行物助成に対して、PR誌を190万円で申請した。
3. Paleontological Researchの平成17年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)実績報告書を日本学術振興会に提出した。

会計(加瀬)

1. 2005年度年会・総会(東京大学)の参加者は361名(一般会員197、学生会員108、名誉会員4、友の会会員14、非会員38)で、会場収入1,557,500円、会場支出315,200円、予稿集・プログラム

の印刷費・送料等諸経費が734,736円だった。

2. 事務所使用料や事務職員の勤務内容・給与等について、学会事務局と文書を取り交わした。
3. 現在2年間隔で発行している会員名簿について、発行頻度の減少や印刷ページ数の圧縮などによる印刷費用の削減を前向きに検討している。
4. PRと化石両誌とも価格を500円ずつ上げることとした。PRは一部3,000円、化石は2,000円となる。
5. 過去の講演予稿集や絶版された学会出版物の電子化について検討し、まずは予稿集のPDF化に着手することとした。
6. 在外会員、欧文誌海外購読会員、友の会会員の会費の改訂原案を評議員会に諮ることとした。評議員会の承認を得れば、会則第12条改訂を次回総会に付議することになる。

行事（前田・柳沢）

1. 年会・例会の開催に関するアンケート結果を集計した。結果は化石誌で公表する予定である。集計結果も参考にしながら、例会のあり方について今後継続審議することとした。
2. 年会・例会用の名札2,000枚を発注した。見積もりは52,000円ほど。デザインを垂直カットのL字型に変更した。
3. 第155回例会の京都大学総合博物館との共催を了承した。広いポスター会場の確保や会場費の点からメリットが大きい。
4. 京都例会の開催補助として例年より多目の約29万円を承認した。ただし、プログラム・予稿集印刷費を例年より10万円ほど節約できる見込みなので、トータルでは例年並みの支出となる見通しである。
5. 講演予稿集の新レイアウト案（A4縦置き二段組）について検討した。Wordなどのテンプレートを学会HPからダウンロードできるようにしたい。
6. 学会開催諸事情に関する情報を収集し、一部を参考資料として2006年年会開催責任者に送付した。懇親会の事前申し込み制の導入を今後検討する必要がある。
7. 2006年松江年会を島根大学との共催とする方向で調整中である。実現すれば会場費の負担が大幅に軽減する。松江市と島根県にもそれぞれ開催補助金を申請中である。
8. 2006年松江年会でのシンポジウムに代表世話人の天野和孝君より申し込みがあった。次回評議員会に諮る。
9. 平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表（B）」に申請を済ませた。第156回例会が対象で、普及講演会を小竹信宏君に打診して内諾を得た。
10. 若手研究者の育成のために、大学院生・学部生を対象としたワークショップやスクールを継続的に行う方向で検討している。

会員（前田）

1. 前回評議員会以降、20名（石田裕之、甲田篤郎、荒井 悠、瀬戸雅浩、多田敏夫、野上規子、早川直樹、栗原 慧、大河内直彦、柴田正輝、香月興太、松田清孝、赤崎広志、平澤 聡、岡崎裕典、鈴木秀史、沢田 健、横田昭彦、河村 裕、Kaim Andrei）の入会、1名（Fernando S. Allan Gil）の欧文誌購読、7名の退会（普通5（Lawrence Zamoras、鈴木 誠、清田泰行、脇本晃美、萩原成騎）、海外2名（Ashwini K. Srivastava、Wilber R. Danner）、3名（荻原正樹、對比地孝亘、渡辺 剛）の資格変更（海外→国内）があった。また、除籍対象者11名（山崎正道、牧野耕治、服部勝美、伊藤博司、稗田佳彦、米光功雄、足立敬一、遠藤 守、山口弘海、山本裕雄、根岸 漂）を除籍した。前回評議員会で特別会員に推薦された13候補者のうち、8名（水野吉昭、能條 歩、高田裕行、川村寿郎、佐藤たまき、林 誠司、昆 健志、松岡廣繁）が資格変更を受諾した。2月2日現在の会員は、普通会員（国内）794名、特別会員345名、名誉会員15名、賛助会員7名、普通会員（海外）34名、合計1,150名である。
2. 今後、会員データを事務局と共有する。
3. 入会の申し込みから承認までの期間を短縮して入会希望者への便宜を図るために、会員の入退会手続きに関わる評議員会運営規則並びに常務委員会運営規則の改訂原案を評議員会に諮ることとした。

国際交流（大路）

1. IPAの事務局に、本会窓口対応者（国際交流係）として、次期役員選挙のためのNominating committeeメンバーを務めることと、次回IPC（北京）でのCouncillor meetingに代理出席する用意がある旨を伝えた。
2. 地球惑星科学連合国際委員会第一回会議に出席した。

企画・広報（間嶋）

1. 学会HPの更新が可能になり、必要な更新の幾つかを済ませた。
2. 小・中・高生を対象とした野外での露頭観察会や、市民を対象とした公開講座などの企画について検討している。

ISI + Sparc + UniBio Press（真鍋・大路）

1. UniBio Pressの今年度の売り上げの半額を、従来の3学会で分ける。来年度以降は、総ページ数やアクセス数を勘案して、古生物学会や鳥類学会にも分配される。
2. アメリカのBioOneにUniBio Pressが参加する予定であり、そのための協定書を準備中である。BioOne参加により、アメリカ570大学での試行閲覧が始まる。多くの機関が購入すれば、大きな宣伝効果が望める。試行期間終了後の継続的な購入を促すためにも雑誌の内容の充実が急務である。
3. UniBio Pressの取締役として、5学会から1名ずつ役員を出す必要がある。
4. ISI登録のためには、欧米の関係学会の会長経験者の推薦状が必要である。
5. UniBio Pressについての案内を京都例会のプログラムに同封した。

友の会・学会図書（安達）

1. 学会図書の近年分を静岡に送付した。
2. 現在会員数は、120～130名で安定している。化石誌の送付、年1回以上の巡検、博物館の特別展の案内などを行っている。
3. 経理を将来学会事務局に統合する方向で検討している。

学校科目「地学」関連学会連絡協議会（間嶋）

本協議会は将来、地球惑星科学連合教育委員会に一本化される見通しである。

欧文誌（小笠原）

1. 欧文誌に総説などの原稿を寄稿してもらいたい場合にも、当方は原稿依頼のような形式は採用せず、編集長等の個人的な努力で対応することとした。
2. PR誌掲載論文の著者が個人のweb等に当該論文のPDFファイルあるいはそれへのリンクを掲載する場合、出版から一年以上経過した物に限って認めることとした。
3. 副編集長制の導入とそれに伴う出版・編集規定の改訂原案を評議員会に諮ることとした。

化石（西）

1. 友の会会員を主たる対象としたコーナーの新設を検討している。
2. 印刷会社は共進印刷で継続する。出版費用の学会負担分は毎号80万円以下とする。
3. イラスト依頼原稿に対する原稿料を各号の印刷予算80万円の中から支出することとした。
4. 特集号の著者負担分の一部免除については、個別に審議して対応する。
5. 広告費を確保するために、掲載料や掲載形態などを検討している。
6. 電子ジャーナル閲覧サービスJ-stageへの掲載を評議員会に諮ることとした。

特別号（真鍋）

Saito *et al.* (1981) の復刻版CD-ROMの刊行を計画している。既存学会刊行物の範疇に当てはまるか否か、また出版・編集規定の改訂が必要かどうかを検討し、評議員会でも意見を伺った上で、継続審議することとした。

「古生物学事典」改訂

1. 朝倉書店より、本学会編「古生物学事典」改訂の申し出があり、これを受けることにした。

2. 棚部一成・北里 洋両君が編集委員長を務め、編集幹事や編集委員を選定することとした。

編集状況報告

欧文誌（小笠原）

1. 第9巻3号を送付し、9巻4号を印刷、発送した。これにより、9巻は終了した。
2. 第10巻1号は6編で、印刷準備に入った。また、10巻2号分は受理5編である。現在の編集状況は、修正中10編、査読中10編、返却2編である。
3. 特集号の編集を、北里ゲストエディターを中心に進めている。10巻3号ないしは4号での刊行を目指す。

化石（西；代理間嶋）

1. 第79号は特集論文5編と論説1編を掲載する予定である。表紙、裏表紙（目次をのぞく）、論説、特集論文は初稿が終了した。
2. 表紙に「日本古生物学会」と明記することにした。
3. 第78号の「学会史・資料」について修正記事を載せた。
4. 新たな広告主の開拓が必要である。そのためには評議員の協力が不可欠である。

特別号（真鍋）

1. 新たな申し込みは無い。
2. Saito *et al.* (1981) のCD-ROM復刻版を計画している。

学術会議・研連報告

古生物研究連絡委員会（北里）

1. 新たな日本学術会議に向けての準備を中心に活動した第19期の総括を行った。19期で取り組んだテーマは以下の通り。1) 教育機関に所属する若手研究者の地位向上、2) タイプ標本の危機的現状の打開に向けた方策、3) 自然史関係の標本類の管理体制の構築とキュレーター確保に向けて、4) 古生物学の普及活動や社会との接点やアウトリーチ。
2. 「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」が示した「設置すべき分野別委員会分野案」について、従来の古生物学研連の位置づけを「応用生物学」領域から「地球惑星科学」領域に変更するよう依頼した。
3. 第20期への引き継ぎ事項を作成中である。

地質研連（前田）

第19期は学術会議からの情報提供がなく、重要な事柄を決定できなかった。

地質科学総合研究連絡委員会第四紀専門委員会（河村；生形代理）

第19期第7回の第四紀学専門委員会が2005年7月29日に開催され、活動の総括の原案について議論し、第20期へ申し送り事項をまとめた。第19期では第四紀の定義、陸・海・氷床にまたがる各地の第四紀環境変遷の対比・総合などの国際問題に対応した。また、国内の関連学会間の情報交換・報告・提言書を作成し、社会との対話をはかるため公開シンポジウムなどを企画した。さらに、関連学協会と連絡しつつ、新たな地球惑星科学連合や地質科学関連学協会連絡協議会、国際地球惑星年計画等へ参加・支援し、連携をはかった。今期も多数の公開シンポジウムを行い、特に第四紀学的重要性と意義について社会と対話するために、「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」というタイトルのシンポジウムを主催した。

理学振興研究連絡委員会（斉藤；代理生形）

「科学・技術を文化としてみる気風を醸成する」ことを理学振興の要と位置づけ、これを表題に日本学術会議第4部の対外報告をまとめた。今後、2005年9月末をもって解散した委員会メンバーによって「科学と文化を結ぶ会」を結成し、岩波の「科学」の「文化としての科学の本」と題する書評のページを通じて理学振興活動の継続を計る。

学術会議（北里）

第20期は従来とは様変わりしてトップダウン的な体質になるようである。連携会員の選出には国際学協会の役員・委員が優先されるだろう。本学会としてはまずIPAに役員を送ることが重要であるが、一方で現在日本学術会議に国際団体として認知されていないIPAの国際性をアピールする努力をしていかなければならない。

地球惑星科学連合（棚部）

1. 連合ニュースのNo.2が配布された。地球惑星科学連合のホームページで閲覧できる。
2. 2006年の地球惑星科学連合大会は2006年5月14日から18日の日程で開催される予定である。
3. 地球生命科学セッションには5つのシンポジウムが立つ。
4. 現在連合のプログラム委員には古生物学会員が参加していない。今後、若手学会員を中心に積極的に運営に関わっていく必要がある。

地球惑星科学連合教育委員会・教育課程部会（天野）

地球惑星科学連合教育委員会から提言した高等学校の必修科目「教養理科」につながる小中学校理科の内容に関して、検討している。

自然史学会連合（甲能）

1. 4回の運営委員会と総会（2005年12月10日、科博分館）を開催した。
2. 現在37学協会で、のべ45,000の会員数で推移している。
3. 学術会議「理科離れ問題特別委員会」、環境省「外来生物法」に、それぞれ連合から意見書を提出した。
4. 2005年11月20日、大阪市立自然史博物館において、平成17年度自然史学会連合講演会「科学への入り口」自然史―第一線の専門家が語る10のとりら―を開催した。参加者は210名に達した。
5. 自然史研究機関立案アクションプランに関連して、総会の後、「自然史学会連合の意義とその未来」についての討論会を行い、活動の問題点を洗い出した。今後、努力する方向性と環境の整備について改めて考えてゆくことになった。
6. ホームページで、連合の活動報告、加盟学協会の行事の広報、エッセイ、ギャラリーの記事を掲載・更新した。
7. 次期代表選挙を行い、投票の結果西田治文氏が選出された。
8. 学会施設使用料について「学術関連集会使用時の大学等独立行政法人施設使用料軽減要望書」案を自然史学会連合代表名で作成中である。今後関係各省庁および主要大学学長へ送付する予定である。

日本分類学会連合（佐々木；代理生形）

1. ニュースレターを発行し、ホームページに掲載した。
2. 日本生物種数調査、日本タイプ標本データベース（J-type）のデータを追加した。
3. メーリングリストTaxaの会員数は、2006年1月1日現在、754名である。
4. 国際動物命名規約日本語版を増刷し、2,800円で頒布している。
5. 2006年1月7日から8日にシンポジウム「ミドリムシは動物？植物？：原生生物の不思議な世界」「日独学術交流史―相模湾動物相調査の歴史と成果」を開催した。
6. 新役員が決定した。本学会の佐々木委員が引き続き庶務幹事を行う。
7. 2007年のシンポジウムは分類学の教育問題に関する内容で開催する予定である。
8. 今後のニュースレターには加盟学会の動向紹介を連載する。
9. J-typeと古生物学会のタイプ標本データベースの連携が検討課題である。古生物学会からも強く働きかけてほしい。

将来計画委員会報告（北里）

第1回将来計画委員会が2006年1月14日に開催された。今期将来計画委員会への付託内容は、社会情勢が大きく変わりつつある今日、古生物学会が魅力ある学会であり続けるために何をすべきかを議論することである。議論は以下の五つのテーマに沿って行われる。1) 古生物学の学術性、学際性、国際性、研究環境について、2) 研究資料の保全と管理に関する問題、3) 後継者育成について、4) 社会貢献について、5) 学会からの情報発信力について。

その他

17th ISC(International Sedimentological Congress)について(安藤)
古生物学会を含む15学会が後援する。第155回例会期間中、会

場に広告ポスターを掲載し、リーフレットを配布する。発表・巡検の申し込み締め切りはともに2006年2月28日で、500名の参加が目標である。詳しくは古生物学会のホームページにリンクされているISCのHPに掲載されている。

IYPE (The International Year of Planet Earth) について (北里)

2005年末の国連総会で、2008年をIYPEのコアイヤーとし、2007年から2009年にかけて活動することが決まった。全部で10のプログラムがあり、2006年末にkick off meetingが開催される予定である。これらの中で古生物学会に関連が深いのは、Geoparkプログラムと化石を中心としたPaleoparkプログラムである。Geoparkは、現在中国とヨーロッパで数カ所ずつ立ち上がっている。実施形態はそれぞれ異なっており、ヨーロッパでは学習・科学の場と位置づけられている一方、中国では観光・政治・宣伝の場としての色彩が濃い。日本では、模式地などの学術的に意義のある場所をGeoparkに推したいと考えている。今後、法体制や関係省庁との調整や実施形態などについて常務委員会内でタスクフォースを作り、仕組み作りに向けた議論を継続する。

審議事項

入会手続きと評議委員会運営規則並びに常務委員会運営規則の改訂について

1. 入会の申し込みから承認までの期間を短縮して入会希望者への便宜を図るために、常務委員の通信による入退会の決定を行えるよう、常務委員会運営規則申し合わせ事項への文言追加の原案が示された。審議の結果、通信による審議は期限と手続きを明確にして行うことを確認した上で、原案を承認した。申し合わせ事項の最後に4)として「会員の入退会の決定に関する審議は、常務委員の通信によって行うことができる。」を追加する。
2. 現行規則では入退会の決定が評議委員会の審議事項であるとの誤解を生みかねないので、これを解消するために評議委員会運営規則第5条の改訂原案が示され、これを了承した。改訂箇所は以下の通り。冒頭の「会員の入会・退会の承認ならびに除名の決定」を削除し、「会員の除名の決定」を「特別会員・名誉会員の推薦、」の後ろへ挿入。
3. 緊急事態に通信形式の常務委員会を成立可能にするために、常務委員会運営規則第3条への文言の追加原案が提示され、これを了承した。末尾に「会長が緊急を要すると判断した場合には、通信をもって常務委員会を成立させることができる。」を追加する。

ポスター賞の選考対象・選考基準と賞表彰規則及び運営内規の改訂について

1. ポスター賞を新設して年会及び例会で授与することとした。選考委員会は賞の委員会とは別に毎評議委員会で選出する。
2. ポスター賞新設に伴い、日本古生物学会賞表彰規則(第2条、第3条、第4条、第6条、第7条)の改訂、並びに学会賞選考委員会及び賞の委員会運営内規(II-3, 4)の改訂と本内規への項目追加に関する原案が示され、これを了承した。2006年年会より適用される。当該条文は、改訂・追加によって以下のようになる。

日本古生物学会賞表彰規則

「第2条 賞は学会賞、学術賞、論文賞、貢献賞、ポスター賞の5種とする。」

「第3条 5) ポスター賞：本会の年会または例会において優れたポスター発表を行った者。」

「第4条 学会賞の受賞候補者は学会賞選考委員会で、また学術賞及び論文賞の受賞候補者は賞の委員会で選考する。貢献賞の受賞候補者は、会員の推薦と評議員2名以上の紹介により常務委員会が受付け、審議を賞の委員会に付託する。ポスター賞の受賞者は、評議委員会において互選された選考委員が決定する。」

「第6条 表彰は賞状及びメダル等の授与し、ポスター賞を除く各賞については総会において受賞理由を公表して贈呈する。ポスター賞については会期中に贈呈する。」

「第7条 学会賞選考委員会、賞の委員会及びポスター賞選考委

員会の組織と運営については、運営内規の定めるところによる。」
学会賞選考委員会及び賞の委員会運営内規

「II. 賞の委員会 4. 学術賞は賞状及びメダルとし、論文賞及び貢献賞は賞状とする。」

「III. ポスター賞選考委員会 (現行のIIIをIVに修正し、新たにIIIとして挿入)

1. ポスター賞選考委員会の委員は5名とし、年会・例会毎に委員を評議委員会で選出する。委員は、ポスター発表の著者ではない者の中から、専門分野等を配慮して選ぶ。
2. 選考委員は発表時間中に採点して会期中に審査を行い選考する。
3. ポスター賞は賞状とする。
3. 学術賞の副賞メダルの贈呈を今後続けるかどうかは、引き続き常務委員会で審議する。

京都例会でのポスター賞授与について

1. 試験的に授与した前回東京年会でのポスター賞と次回松江年会より新設されるポスター賞の継続性を考慮し、第155回京都例会でもポスター賞を授与することとした。選考委員や選考基準等については改訂された運営内規に則る。
2. 評議委員の互選によって、安達修子君、長谷川四郎君、加瀬友喜君、北里 洋君、柳沢幸夫君の5名を選考委員として選出した。

2006年松江年会でのシンポジウム案について

次回松江年会でのシンポジウム案「日本海の生物相の変遷と環境変動ー過去、現在、そして未来へ向けて」が承認された。非学会員の旅費については学会が負担する可能性もある。

第156回例会について

第156回例会を2007年2月2日(金)～4日(日)に徳島県立博物館(徳島市八万町寺山分化の森総合公園)で開催することが承認された。普及講演会として千葉大・小竹信宏君による「生痕化石の世界ー過去の生物の行動様式の進化を探る」を行う。

講演予稿集の新レイアウト案について

2006年松江年会からA4に2段組要旨を縦に2つ配列するレイアウトを採用することとした。それに伴い、HP等で会員への周知を徹底する。要旨では12ポイントの使用を推奨する。今後行事係が諸手続きを進める。

個人講演申し込み手順の改正について

1. 個人講演は筆頭著者として一人二題までとする。
2. 講演区分を口頭発表とポスター発表に大別し、口頭発表をさらに従来通りの講演区分に分ける。
3. 講演区分という呼称をキーワードに変更する。
4. 発表日時の希望受付を廃止する。
5. 以上の改正点について、「化石」誌等で周知を徹底する。

事務局職員の雇用形態について

1. 事務局職員を日本動物学会との共同雇用とし、毎週火～木曜日の3日間を古生物学会で雇う。
2. 建物の使用料の一部を本学会が負担する。今後、事務所の賃貸契約の更新に伴って使用料の値上げも予想されるが、賃料が上がらないように最大限努力する。

会費(在外会員、欧文誌海外購読会員、友の会会員)の改定について

1. 在外会員の会費を8,500円から10,000円に、海外購読会員の会費を6,000円から7,000円に、友の会会員の会費を3,000円から3,500円に改定する原案を、日本古生物学会会則第12条の改訂と合わせて次回総会に付議することとした。
2. 以下の会則第12条の改訂原案について審議した。

「第12条 会費の金額は総会に計って定める。会費は普通会員年8,000円、特別会員年10,000円、賛助会員年1口15,000円以上とする。名誉会員は会費納入の義務がない。在外の会員は年10,000円とする。また、欧文誌海外購読会員の購読料は年7,000円とする。」

ところが、在外の会員には特別会員が含まれるため、在外の場合は普通会員と特別会員で同じ値段になることが指摘された。現行の会則で問題がないかどうか常務委員会で再度検討した上で改めて改訂原案を作り、これについて次回評議委員会で再度

審議することになった。

欧文誌の編集体制と出版・編集規定の改訂について

1. 新たに欧文誌副編集長を置くこととした。京都例会中に刊行物出版委員会を開いた上で委嘱する。
2. 副編集長制導入に伴い、出版・編集規定第3条の改訂原案について検討し、これを承認した。これにより、第3条末尾に以下の文言を追加することとなった。

「なお、*Paleontological Research*については、編集長のほかに副編集長若干名を置き、編集委員に加えることができる。」

化石誌のJ-stageへの掲載について

常務委員会では、電子ジャーナル閲覧サービスJ-stageへの和文誌掲載を評議員会に諮ることとしたが、電子化のコストに関して新たな問題点が発覚したため、本評議員会への提案を見送り、常務委員会で再検討することとした。

Saito et al. (1981) 復刻版CD-ROMについて

1. 復刻版CD-ROMの刊行に際して、出版・編集規定の改訂原案を常務委員会で作成する。
2. 著作権の問題や引用上の問題などについて、常務委員会の問題を整理して継続審議することとした。

IPA役員候補の推薦について

IPA 役員のNominating committeeに大路君を送り、役員に北里君、棚部君、平野君の順で推薦することとした。

科研費審査委員候補の情報提供について

学術振興会からの科研費審査委員候補者の情報提供依頼に対して、学術賞・論文賞受賞者とその他適当と認められる会員を候補者として推薦してゆくこととした。

IPC（北京）に参加する学生への援助について

北京で開かれる第二回国際古生物学会議（IPC）に参加する学生や無職のボスドクを対象として、アワードの形で旅費の一部を援助することとなった。講演要旨を審査対象とし、京都例会やHP上で会員に対して早急に周知する。

受賞ポスター

日本古生物学会第155回例会 (2006年2月京都大学総合博物館) 優秀ポスター

成田敦史君・松本みどり君・山田敏弘君

北海道蝦夷層群三笠層から産出したスズカケノキ科(Platanaceae, Proteales) 化石の産状とその意義

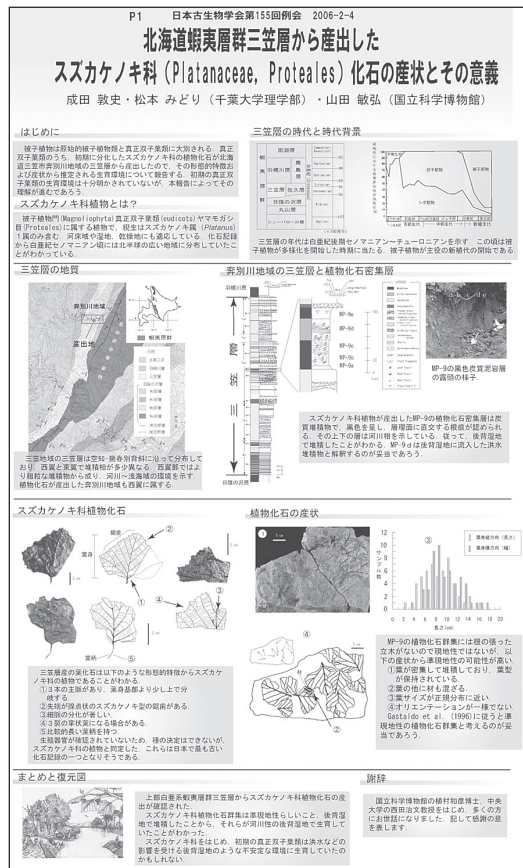
山口龍彦君・長尾良一君・神谷隆宏君

佐賀県古第三系杵島層群杵島層の貝形虫化石群とその意義



ポスター受章者

左から神谷隆宏君、山口龍彦君、北里 洋会長、成田敦史君、山田敏弘君、松本みどり君。



成田敦史君ほかポスター



山口龍彦君ほかのポスター

2005年交換・寄贈図書目録

日本古生物学会は交換・寄贈による内外の出版物を多数保有しています(古生物学会報告・記事no.120, 化石56号, 58号, 60号, 62号, 64号, 66号, 68号, 75号, 77号を参照)。これらの蔵書は静岡県自然学習資料保存事業室(〒424-0806静岡市清水区辻4-4-17静岡県中部健康福祉センター庵原分庁舎内)で管理されています。図書の利用については化石78号をご参照下さい。

担当：川辺文久

国外出版物

Australia

Memoirs of the Museum of Victoria: vol. 61, nos. 1, 2 (2004)

Transactions of the Royal Society of South Australia: vol. 129, parts 1, 2 (2005).

Austria

Annalen des Naturhistorischen Museums in Wien: 106 B (2005).

China

地質学報 *Acta Geologica Sinica*: vol. 78, no. 6 (2004), vol. 79, nos. 1-6 (2005).

Acta Geologica Sinica (English edition): vol. 78, no. 5 (2004), vol. 79, nos. 1, 2 (2005).

微体古生物学報 *Acta Micropalaeontologica Sinica*: vol. 21, no. 4 (2004), vol. 22, no. 1-4 (2005).

古生物学報 *Acta Palaeontologica Sinica*: vol. 44, no. 2-4 (2005).

古生物学文摘: vol. 19, no. 4 (2004).

古脊椎動物学報 *Vertebrata Palasiatica*: vol. 42, nos. 3, 4 (2004), vol. 43, nos. 1-4 (2005).

Czech

Acta Musei Moraviae, Scientiae Geologicae: vol. 89, (2004).

Geologická bibliografie České republiky (Geological bibliography of the Czech Republic): 2002, 2003, supplement.

Práce České Geologické Služby (Czech Geological Survey Special Papers): no. 15, (2003).

Sborník Geologických věd Antropozoikum (Journal of Geological Sciences, Anthropozoic): 25 (2004).

France

Documents des Laboratoires de Géologie Lyon: no. 160 (2004).

Palaeovertebrata: vol. 32, fasc. 2-4 (2003).

Germany

Abhandlungen des Naturwissenschaftlichen Vereins in Hambrug: NF 39 (2005), NF 40 (2005).

Geo Alp: vol. 1 (2004).

Jahreshefte der Gesellschaft für Naturkunde in Württemberg: Nr.159 (2003), Nr.160 (2004).

Senckenbergiana Lethaea: Bd. 84, heft 1 (2004), Bd. 85, heft 1 (2005).

Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde, Serie B (Geologie und Paläontologie): Nr. 348-351 (2004), Nr. 352-355 (2005).

Verhandlungen des Naturwissenschaftlichen Vereins in Hambrug: NF41 (2005).

Zitteliana: A44 (2004), B25, 26 (2005).

India

The Palaeobotanist: vol. 54 nos. 1-3 (2005).

Israel

Israel Geological Society, Abstracts: 2004, 2005.

Geological Framework of the Levant Volumes 1 and 2, 2005

Italy

Bollettino della Società Paleontologica Italiana: vol. 43, nos. 1-3 (2004), vol. 44, nos. 1, 2 (2005).

Geologica Romana, Terza serie: vol. 37 (2003-2004).

Poland

Acta Palaeontologica Polonica: vol. 50, nos. 1-4 (2005).

Biuletyn Państwowego Instytutu Geologicznego: nos. 413-416 (2005).

Geological Quarterly: vol. 48, no. 4 (2004), vol. 49, nos. 1-3 (2005).

Russia

Paleontological Journal (Russian edition): nos. 5, 6 (2004), nos. 2- 5 (2005).

South Africa

Navorsinge van die Nasionale Museum Bloemfontein: vol. 20, parts 1-5 (2004).

Spain

Boletín Geológico y Minero: vol. 115, no. 4 (2004), vol. 116, nos. 1-3 (2005).

Revista Espanola de Micropaleontologia: vol. 36, no. 2 (2004), vol. 37, no. 1 (2005).

Switzerland

Revue de Paléobiologie: vol. 23, no. 2, volume spécial 9 (2004), vol. 24, no. 1 (2005).

UK

Systematics and Biodiversity: vol. 2, issue 2-4 (2004), vol. 3, issue 1-4 (2005).

USA

Bulletin of the American Museum of Natural History: no. 284-287 (2004).

Novitates, American Museum of Natural History: nos. 3454, 3455, 3458, 3461 (2004).

Oklahoma Geological Survey, Circular: 110 (2005).

Paleobios, Museum of Paleontology, University of California, Berkeley: vol. 25, no. 2 (2005).

Proceedings of the California Academy of Sciences: vol. 56, nos. 1-37, supplement 2 (2005).

US Geological Survey, Professional Paper: 1702 (2005).

North American Paleontological Convention, Program and Abstract: Paleobios vol. 25, supplement to no. 2, 2005.

国内出版物

大学出版物

東京学芸大学紀要, 第4部, 数学・自然科学: 56集 (2004).

東京大学海洋研究所ニュースレター: 9号 (2003), 10号 (2004), 11号 (2005).

新潟大学理学部地質科学教室年報: 2号 (2004).

Science Reports of Niigata University, Geology: vol. 19 (2004).

博物館出版物

御所浦白亜紀資料館報: 5号 (2004), 6号 (2005).

Hayashibara Museum of Natural Sciences, Research Bulletin: vol. 2 no. 2 (2004).

北海道開拓記念館: 研究紀要33号 (2005), 調査報告44号 (2005), 北方文化共同研究事業調査報告 (2005).

三笠市立博物館紀要: 9号 (2005).

瑞浪市化石博物館: 研究報告31号 (2004), 30年の歩み (2005).

その他

Biomineralization (BIOM2001): formation, diversity, evolution and application. Tokai University Press, 2004.

釀金者御芳名

川幡穂高, 尾上哲治, 入月俊明, 佐々木猛智, 小松俊文, 生形貴男

平成17年7月12日から12月31日までの間に, 上記の方々から本会へ釀金を賜りました。古生物および本会の活性化のため有効に使わせていただきます。ご厚志に対し深く御礼を申し上げます。

釀金のための郵便振替口座番号は次の通りです。

00130-6-776553 日本古生物学会・釀金口

お詫びと訂正

78号に以下の訂正があります。お詫びして訂正致します。

1. 「学会史・資料」の日本古生物学会史〔平成7年（1995）～平成16年（2004）〕のp.83の「平成13年（2001），6月18日 元会長木村達明会長逝去，斎藤会長弔辞。」は「平成13年（2001），6月18日 元会長木村達明会長逝去，森会長弔辞。」の誤りでした。

編集委員会より

新しい編集委員として最初の号になります。今回は2005年1月の日本古生物学会第154回例会で国際惑星地球年の協賛シンポジウムとして開催された「西太平洋におけるIMAGESコアを用いた高時間解像度の環境復元」での講演から5つの論文を特集として掲載しました。本特集号で最近の古海洋学の進展の一端が皆様に伝えることができれば幸いです。

西 弘嗣

本号より，編集委員を務めることになりました。総説ならびに古環境解析や微化石に関する論文を担当いたします。論文を国際誌に投稿する研究者が多くなり，どの学会も和文誌の編集に大変苦労していると聞いております。「化石」が魅力ある和文誌として存続できるよう編集委員として力を尽くしたいと思っております。しかし，「化石」の存続と水準の維持のためには，会員の皆様からの質の高い原稿が多く寄せられることが何より肝要かと思われまますので，よろしくお願いいたします。

井龍康文

新たに編集委員を任命されました高知大学理学部の岩井と申します。現在珪藻化石層序を足場に生物海洋学の視点でものをながめ，古海洋生物学・古生物海洋学を考えて行きたいとの思いを胸に，研究・教育活動に取り組んでいるところです。これまでに会員・編集委員の皆様が築かれてきた有形無形の資産を継承発展できるよう努力して行きたいと思ひます。叱咤激励のほど宜しくお願いいたします。

岩井雅夫

